山とスキー

第十三號

大正拾年六月七日第三種郵便物認可大正拾一年三月十四日印刷同年三月十五日發行

第十三號目次

記事

冬季登山とスキー登山との定義……大島亮吉（二）
東宮殿下スキー御練習記……稲田昌植（七）
旭岳……板橋敬一（二三）
思ひついたまゝ……木原均（二〇）
本邦に於けるスキーの團体……（一）

圖版

上高地の朝……松方義三郎（一）
エヴェレスト登山隊の主腦者……（九）
奥手稲連山……（札幌附近）……松方義三郎（一七）

上高地の朝　松方義三郎

冬季登山とスキー登山との定義

慶應義塾山岳部　大島亮吉

左に記せるはMarcel Kurz 氏の Castor et Pollux なる紀行文のうちの挿文の一部を比較的忠實に自分の拙き邦文に移してみたのである。勿論自分も Kurz 氏自身がこの文中に言つてゐる樣に、冬季登山とスキー登山に定義を與へることが、決して眞の Alpinisme の發達のために大なる貢獻をなすものであるとは思はないが、この二個の名辭を混同し或ひは各自勝手な解釋に依つて用ひるよりは、この Kurz 氏の提唱する定義なるものに從つて記錄したならば、却つて都合のよい、便利な時はありはしないかと思つたので、敢へて諸君の前に、くだらぬ一文を戴せて貴重な紙面を汚さんとしたのである。

× × × ×

一九一三年三月五日に Dr Alfred von Martin 氏は二友人と共に Castor(4230)に、同じく七日には Pollux(4094)に登山を試みて成功した。Oesterr Alpen-Zeitung(1913)にDr von Martin は記して「この登山は Zermatt の双兒峯に對しての冬季初登山であり、またこれに對してスキーの最初の部分的使用である」と。然し乍ら同誌の八八四號二一〇頁に於て更にそれを修正して、Dr von Martin は、Castor の冬季初登攀者は一八九三年十一月二日に登つた或る伊太利のアルピニストであることを承認したのである。實際余は Rivista Meusile del Club Alpino Itariano(1894)の五一―三頁に "Escursioni invernali" の表題に

Il Castore e la vallata d'Ayas なる副題をつけたその登山の記事を見出し得るのである。それに於てトリノのアルピニスト M. Adolfo Gervasone 氏は案内者 Salomon Meynet e Agostino Verraz を連れて Ayas の谷の Fiery から Castor に登山したと書いて居る。然し乍らこの重大な意義を有する登山を記した三頁のうちに筆者はたゞ Ayas の谷の秋のシャルマントな美しさをのみ敍して、Castore それ自身には甚だ漠たることしか述べてゐないのである。即ち余は Gervasone 氏が Q Bella (3601) の登山小屋に休息した後、朝十時頃そこを出發して頂上に向つたと言ふことを知り得るのみである。その時天候は極めて良くなく、風は激しく、寒さは嚴しく、霧が深かつたので、氏は斷然頂上到達を中止し、薄暮までに Fiery に着くために、足先を Ayas の谷に向きかへたのであつた。

偶々十一月二日と言ふ日に行はれたこの登山に對して余は永い間ある一個の疑問を有つてゐた。そして今機會は余をしてその疑問をこゝに發表せしめたのである。即ちその疑問とは、何故この冬季登山なる、新らしきアルピニズムが漸く世間的にならんとしつゝありし當時に於て、この Gervasone 氏の Castore の登山が、重大視されなかつたかと言ふことゝ、この新征服者が、何故に自ら最初の冬季登山者として、彼が敵城とよりよく闘はざりしかと言ふことである。然してより重要な問題は此處にあるのである——一年のうちの何時の時期を冬なる名辭の下に限定し得るかそれは曆に定められた十二月二十二日——三月二十一日までの時期であらうか、それともまた眞のアルプの非常に永い毎年一定でない冬の狀態にある時期を限定するのか。更にまた曆に定められた冬なる時期の限定が、眞のアルプの冬なる時期と一致しないが故に、新らたに專斷的でもなく、因襲的でもない。ある冬なる時期の限定を造ろうと言ふのだろうか。

余はこれらの問題に解決を求めんとして、各アカデミィクな山岳會のあらゆる年報を涉獵して、各山岳會の規則のうちに定められたアルプに於ける冬なる時期の新らしき限定を求め得たのである。即ちそれに依ると、

Akadem. Alpen-club, Zürich	十一月一日四月一日
Akadem. Alpen-club, Bern	十一月　四月
Akadem. Alpen-Verein, Berlin	十一月一日四月三十日
Akadem. Alpen-Verein, München	十二月一日四月三十日

の如くであるが、これに依りても直ちに了解せらるゝ如くアルピニストのうちに於てさへもアルプの冬の繼續期間に就ては一致した意見はないのである。これはさもあるべきことで、毎年、年に依つて一定でないアルプの冬を一個の獨斷的方法を以て、どうして限定することが出來ようか。實際にアルプの冬の狀態はある年には十二月に始まつて五月まで續くことがある。若しこの年の、未だ新雪の降らな

い晩秋の好晴の日に登山したと言ふ場合に於て、ツユウリッヒ、ベルン、伯林の各山岳會の規定した冬なる時期の限定に從つて記錄するならば、それは正しく冬季登山でなければならぬ。然し事實に於てアルプは未だその年の冬の狀態に達して居らぬのである。また例へばその年の四月初旬に於て行はれた登山は、譬へそれが全く冬季登山としての性質を具備してゐるにも拘はらず、ツユウリッヒ山岳會の規定に從へば、冬季登山でない樣な場合を生じて來る。

あるアルピニストは余に語つた。吾々が眞に自己の悅樂のために登山をするのであつて、それを或ひは年報に發表したひために、または他から自己を高級な或ひは特殊な登山者圈内に階級づけられたいためにと言ふ樣な卑俗な欲望のために登山するのでなければ、何時、徒步で登り、或ひはスキーを使用して登ろうとも、それは大した問題ではなかろと、全く余もそれと同意見である。そして余はこれから余が記するこの紀行に「冬季初登山」なる語を用ゆることは固辭してやまないのである。然して此處に於て余は伊太利の彼の Vittorio Sella が、既に八十餘年前に於て Cervin, Mont-Rose, Lyskamm や其他のあの偉大な峯々を殆んど連續的に登攀したのは、傳に聞く所に依ると冬の眞中——然かもそれは曆に定められた冬の——であつたと言ふことや、この尊敬すべき Montagnard が多くの伊太利のアルピニストを導いて、冬季登山なるこの新らしきアルピニズムの型式を基礎づけたことなどを回想すると、余はこの純潔な、素朴な、そして偉大なアルピニスト、嘗つて名を爭はざりし、また久しく名を識られざりし Vittorio Sella の孤高なその生涯に深く啓發せらるゝのである。然し乍らそれらの登山は吾々のこの小さな議論に對して何等の材料をも提供する所がない。そしてその當時よりも事態は複雜となり、冬季登山の範圍も擴大せられた。然し統計のなき歷史の存せざる如く、歷史のなきアルピニズムはないのである。

扨て余は敢へて余がこの問題を提出したことに依りて、これに對して余自身に解決を與へたいと思ふ。即ち余はアルプの冬なる時期の限定に對しては、これまでの因襲的な曆の定めた限界に從ふことが最も適當ならんと思ふのである。この曆の定めた限界のうちには一個の破るべからざる事實がある。それはこの曆の定めた限界（十二月二十二日——三月二十一日）の期間は常にアルプは冬の狀態にあつて、嘗つてその異例をみないと言ふことである。余が因襲的な曆の定めた限界に從はんとする理由は即ち其處にあるのである。

未だスキーのアルプに紹介されない以前に於て、專ら行はれた徒步に依る冬季登山術は、今日益々すたれゆく傾向を有し、スキーを用ひぬ冬季登山は現今は極めて稀有な事實である。然して冬季登山とスキー登山との區別を適當に

最も簡單に言ひ得んとするには、この冬なる時期を限定するに、暦の定めた因襲的な限界を用ゆることが、それを最も容易になすのである。即ちスキー登山には何等時間に關しての限界はない。然して冬季登山には暦の定めた冬なる限界を用ゆるのである。これに依りて余は斯くの如き定義をこの兩者に與へ得るのである。

（A） 冬季登山　總て徒歩またはスキーを使用して暦の定めた冬の期間に行はれた登山（若しスキーが使用せられた場合には、特にその事實を表記すること）

（B） スキー登山　總て完全に、または一部分スキーを使用して行はれた登山。

然して後者スキー登山の場合に於ては常にそのスキーを使用することが、頂上到達の目的のために利用せらるゝものとして考へられてゐる故に、スキーの使用は雪質とか、特別な時間それが、果してスキーの使用に適してゐるか否かに應じて、アルピニストは必然的に、また無意識的にそれを檢べる樣になるである。次ぎに同じくスキー登山の場合で、その登山に於てスキーが總體的に使用せられた場合は勿論言ふまでもなく、スキー登山であるが、更に部分的にスキーの使用せられた場合――即ちこの場合にはスキーでは唯目的とする山頂の麓までしか達し得なく、そこでそれ以上は夏に於けるが如く、ある一定した arete の登攀をなすか、或ひは他の山腹の岩壁登攀をなすかに依つてその山頂に達し得べきものであつて、アルピニストのうちでは、斯くの如き登山法を Combinaison と稱してゐる――に於て徒歩登攀とスキー使用の割合の如何なる點までが、スキー登山なる名辭の下に指示し得らるゝかに就て爭論せるアルピニストがあつたが、然しそれは絶對に無益なことゝ思ふその使用距離が如何なる小部分なりとも、スキーの使用せられし登山はすべてスキー登山である。然し乍ら實際に言ふと、瑞西には其の頂點まで或ひは頂點へとりつく最後の登路をスキーに依つて到達し得るやうな雪峯は例外に屬すべきものなのである。例へば Ebnefluh の樣な雪の圓屋根に於ては、傾斜の點にては理論上頂點までスキーの使用を許すが、併し其の頂部の雪質は殆んど常に風に曝露されてゐるために堅硬なクルストか、或ひはマルブル、クルストである。またこれがためにこの樣な平らな頂上は、その雪を吹きはらはれたり、Skieur に對しては餘りに雪質の變化多くて、極めて困難な場合が多いのである。故にアルピニストはこの場合もコンビネーゾンの方法に從つて、スキーを棄てゝ徒歩で登つた方が、勞力少く且より速かに頂上に到り得るのである。

スキーは單にアルピニズムの一方法たるに過ぎない。故に岩稜登攀の距離とスキー使用の距離とが如何なる程度まで關係があるかと言ふことは、さして重大な問題ではない若し余が登山の記錄を記するならば、Dent-Blanche(Ski);

Zinal Rot horn(Ski)と表題になる語を括弧する。これは明らかにスキーはアレトの麓に預けられ、それが最高點に達するためにのみ効果を與へたと言ふことを意味するものなのである。若しあるアルピニストがスキーを用ひずに Zinal Rot horn のエスカラードや Dent-Blanche の南アレトを登るとすれば、それはスキーで達するよりも多大な時間を要し、そこで第一にこの expedition の根據地なる登山小屋に達するためには、冬の間はスキーを用ゆることが、唯一の方法であることを忘れてゐるのである。夏に於て登山小屋から直ちに山頂に登ることが出來るが、冬に於て山頂へは谷底の最後の村から始めなければならぬ。そこでまた夏に於てアルピニストは、峠でも越すかの如くに山頂を横斷して、一つでなく二つの行路を行く事が出來て旅行者の興味を倍加することが出來る。然し冬に於てこの絶頂横斷は多くの場合不可能である。冬のアルピニストは自分のスキーをアレトの麓に預けて其處から山頂へ攀ぢ登り歸途に再びそれをはくのである。その凍りついた岩と岩の間に刻まれた、けはしい氷の階段をくだつて來て、その麓に深く雪に埋もれた自分のスキーが、安全なその持主の姿を迎へて呉れる時やまた其處から美しいシィラージュが、吾々にとつてはノエの安全な箱舟のやうに、夜になつてうれしい屋根と暖かい寢床を與へて呉れる小屋まで續いてゐるのを望んだ時、アルピニストの胸はたゞ感謝と至福に滿ちた、言ひ知れぬ感覺を以て充ち溢れるのである。

(Ski; Annuaire de A. S. C. F. 1918)

スプール

◆高山の頂近くで一本のスキーが主人を置去りにして谷底目掛けてまつしぐらに辷り出した話である。

一七〇〇米と云へばそう高くもないが、北海道の二月の寒さである。假松の上に積つた雪は硬化して、所によつては青い氷になつて居て、頑丈なスタイグアイゼンを附けた効もなく踏み付けるスキーは氣味の悪い音を立てゝはね返される樣な心細い狀態であつた。

一寸した修理の爲に脱いだスキーが、濃霧を吹きまくる突風にさらはれて、ペンドの部分を先にして、卅度の傾斜を持つた純白の無立木の、稍コンケーブな大斜面を、音もなく滑つて行く。行手は約一〇〇〇米下の麓の森林まで何の遮るものもなく見通せる大雪面。

生きながら、自分の魂を死神に奪はれて行くのを、まざまざと見せつけられる樣な、驚愕、落膽、悲哀が一行の心を支配した。

たつた一本のスキー。一本のスキーであるとは云へ、それが失はれることは一行の數個の生命を無きものにするかも知れなかつたのである。

いくつかの鋭い視線が主を離れたスキーを追ふ。身を以て追ふにはあまりに滑落の危險が多かつたのである。

十秒の後にスキーは不思議にも止まつた。斜面の一寸した隆起に、ひつかゝつて。さあ、その止つたスキーを一行の手に入れる爲にどれ程慎重な行動がとられたろふ。反逆せるスキーを再び自分の足下に踏付けた×氏の面には、再び生命を把握した喜びがあふれた。

東宮殿下スキー御練習記

男爵　稻田昌植

大正十一年一月十三日、此の日は我がスキー界に取り最も紀念す可き日である。此の日は東宮殿下は富士山麓でスキーの御練習を遊ばされたのである。

種々の運動に御熱心な殿下はスキーに對しても早くより御練習の御希望を有せられたが、本年一月初旬より沼津御用邸御靜養中であつたので、その間の一日をスキーの御練習に充てられる事になつたのである。そのスキー地調査のために二荒伯と共に八日に富士山麓に出張し種々調査し翌日一度歸京し十一日に更らに再び出かけたのである。都合よく九日から降り出した雪は此の時になつて瀧ヶ原で五寸「馬返し」では一尺餘となつて居つた。馬返し以上には充分積雪のある事は勿論であるが太郎坊以下の山麓一帶を調査して漸く十二日の夜になつて一のプログラムを作製し二荒伯より沼津御用邸へ電話をかけて翌十三日御出を乞ふたのであつた。

殿下は當日午前八時珍田大夫、奈良武官長以下を從はせられ自動車に召されて沼津御用邸御出門遊ばされ、九時半に瀧ヶ原の陸軍廠舍に御着になつたのである。此處で僅少の御休憩時間中余よりスキーに就て簡單なる御說明を申上げ、(大正十一年二月二十五日發行「旬刊朝日」第一號掲載拙稿參照)十時再び自動車に召され十時二十分五本松御着に相成り此處で始めてスキーに召されたのである。運動服、鳥打帽と云ふ御輕裝で諾威式スキーを履かれ、二荒伯と余とは御相手をしつゝ馬返し方面に御供し珍田大夫及び奈良

武官長は藁靴で又土屋侍從及び王生武官はスキーで御供したのであつた。五本松で平地滑走を三十分御練習になつたのでその後坂路を馬返し迄登られる事は左程御困難遊ばさざる樣拜したのであつた馬返しに御着になつたのは十一時半であつた。此の馬返しの小屋の後の二十五六度の傾斜を利用して二荒伯と共に斜面滑走の種々の方法を御說明申上げ殿下も亦御自身幾度も御練習遊ばされたのである。此處で約三十分の御練習後御還啓の途につき給ふ事となつた。

余が御先導申上げ二荒伯が殿りをし殿下は中央の位置をとり給ひて御出發になつたが、雪質も相當によく且つ殿下のスキーは非常に滑りがよいので御歸途には非常によい御練習を遊ばされた事となつた。勿論度々轉倒されたが御元氣な殿下は毫も意に介し給はずその度毎に或いは御質問を出され或いは種々工夫を遊ばされて滑走の姿勢を整へ遊ばし些の倦怠をも御示しにならなかつたのを拜して實にその御熱心に感激したのであつた。余より「スキー家仲間では三千回轉びませぬと一かどのスキー家になれぬと申して居ります」と申上げた際も頻りに點頭かれたのを拜したのであつた。

午後一時には五本松に御着になり、再び自動車に召されて瀧ケ原廠舍に御着御辨當を召され二時には御機嫌麗しく沼津へ御還啓の途につかれたのである。

以上が當日の殿下のスキー御練習の梗概である。之に付て二三の事項を附記したいと思ふ。

第一に云ひたいのは殿下が非常に御健康であると云ふ事である。乘馬、ゴルフ、テニス其他各種の運動を遊ばされる事は直ちに御健康で在らせられる事を拜察する事を得るのであるが、今スキー御練習の御樣子を拜しても然りである。始めてスキーを御試乘になりしにも不拘よく五本松、馬返し間一里餘を始終御元氣でスキーで通された事は殿下の御健康を裏書するものであつて實に吾人は邦家將來のために欣喜惜く能はざるものである。

次には殿下は非常に御熱心であると云ふ事である。他の各種の運動に御熱心であり從つて著しく御上達である事は豫ねて伺つて居る事であるが、スキーに對しても御同樣である。約三時間の間常に非常な御熱心を以て平地滑走、斜面滑走の御練習を遊ばされ、正規の姿勢の滑走に努められ御質問も度々發せられ、御會得になるや直ちにその方法にてドシ〳〵御練習を遊ばされ、馬返しより御歸途につかせられし際の如き、轉倒されて御洋服に附きし雪も拂はせ給はず、瞬時の間も惜しませ給ふて緊張した御練習を遊ばされた事は實に感激の極みであつた。殿下は各種の運動に親しませられると同時に實に立派なスポーツマンシップの所有者であらせられるのである。運動の技術のみに足るものは未だ賞揚す可きで無い。運動を貫く一大精神を体得してこそ眞の運動家と稱す可きである。殿下は既に此の境域に

達して居られるのである。此の事は殿下御聰明の表現であつて吾人は特筆大書して天下の運動に親しむ人に告げたいと思ふ點である。

スポーツマンシップとは各種の運動を一貫する一大精神であるが今スキーを通して此の精神を解剖すれば此の精神は純潔であり克己心であり、向上の精神であり更らに又弛緩無き緊張せるものであらねばならぬ。果して然らばスキーの精神陶冶に及す作用は實に偉大である。スキーをするものは此のスキー術の技術の末のみに走らずスキー術の基礎をなす此の大精神を体得して欲しい。此の事は殿下の御立派な御態度を拜して特に強く主張して置きたいと思ふのである。

終りに云ひたいのはスキー界の發展方法である。數年來スキー界は著しい發展をした。然し之は寧ろ普及と云ふ發展であつて統一ある秩序的發展では無いと思ふ。余は殿下のスキー御試乘を機としスキー界の發展を新しき方面に向けたいと思ふ。之れ殿下の御熱心に報い奉る途でもあらねばならぬ。之に付ては種々協議を重ねて居る。殿下の御練習を紀念する爲に富士山を一大スキー練習地としたいと云ふ計劃もその一である。即ち太郎坊を練習根據地として宿舍其の他の設備をしやうと云ふ話も出て居る。之が實現されたら面白いスキー地となるであらふと思ふ。

更らに一九二四年に開かるゝ萬國オリンピックのスキー競技に我國からも參加させたいと云ふ議も出て居る。之が實現される事となれば我がスキー界にとり一の革新である我々微力乍ら之に一歩を進めたいと思ふのであるが、天下のスキー家の助力を乞ひて之が實現を計りたいと思ふのである。（一一、二、二一）

スキーに召せる殿下を拜して

富士ヶ根をおほふ吹雪のひまよりもスキーに召せる日の皇子を仰く　昌植

スキー召す雄々しき皇子の御姿に富士の深雪も舞ひ狂ふなり　昌植

富士の裾二千餘尺の高原にスキー召します日の皇子を仰ぐ　芳德

旭岳

板橋敬一

春のヌタツク

一九二一・三・二六—二九

同行者。西尾　加納　松川　齋藤

人夫の太田さんはほんとに好い人であつた。あの頃の旅のことを思ひ出すと決つて、生來の遲鈍さその儘で自分達五人の若者をあしらつて呉れた太田さんが浮んで來る。山から滑り疲れて歸つて來ると、薄暗い小屋の中で眼を光らしていつもいそ〳〵と火を起したり、薪を切つたりして呉れた。

「今日はね、もう少しで頂上と云ふ、もう氷ばつかりの所迄登つて來たんだよ」

とGが云ふと、太田さんは、「さうかい」と早口に少しも感動もしないやうな口振で、しかも厚い下唇をうんと突き出して云つた。何時の間にか自分達の間でも「さうかい」と云ふことが流行するやうになつた。殊更に太田さんの前でその調子を眞似て云ふと、それを感付いてかニヤリと、とてもたまらないやうな笑を無愛想な赫ら顔に洩した。

毎日スキーで山に出掛けて、十時間の餘も滑り廻るのだから猛烈に腹が空く。で、太田さんが念を入れて作つて呉

れた。温い飯に夢中になつて飛び付く。米は日に日に不足になつていつた。雪に埋もれたこの小屋は、造材のそれであつたのが雪が少いために、二月の末に柚夫は皆下山して了つて人は一人も居らなかつた。人間の香をしたひながらそこ〻とかき廻してゐる中に芋殻が出て來た。ワカメもあつた。終には米まであつた。太田さんが發見して一番喜んだのは味噌で、まつたく愉快氣だつた。

「これなら五日でも十日でも大丈夫だね——」

急に氣強く、語尾に力をこめて太田さんは云つた。皆も有頂天になつて籠城を覺悟した。直ぐ側を流れるユコマペッの水は、旭岳の噴氣孔からの硫黄を含んでゐて、飯盒の蓋をとると飯がぷんと變な香をたてる。さうした飯と切干やワカメ迄、馬が秣を食べるやうに膨大な胃の腑につめこむその後には疲勞から來る快い眠があつた。しかし夜になると柾で四圍のかこつてあるだけの、小屋の寒さは激しい。太田さんは毎晩殆ど睡をとらずにストーブをたいて呉れた。ふつと寒さで眼をさましては、種々なとりとめもない話を、煙で眼をしよぼ〳〵させてゐる太田さんとことりかはす。屋根の間から空を眺めると恐ろしい程の暗さである。時には雪がしつきりなしに降つてゐる。河のせゝらぎは高い。何かに脅かされさうな氣持になつて小屋からは一歩も外へ出られない。針葉樹は威壓するやうな黑さだつた。

朝二時を過ぎるともう食事の用意を始めて、日の出た時分には小屋を飛び出す。昨日のスプールには輕く雪が溜つてゐて空は相變らず怪しい。峰の平に出て、黎明の空氣の中に大きく靜まつた針葉樹の間を、ぐい〳〵と山の核心へ向つて行く。壯嚴な森のところ〴〵を宮殿とか奥津城とかとりどりに形容する。雪は深い。ユゾライテフが梢の雪を散らしてぱたぱたと飛び立つ。脚下の森林は朝日を受けて美しく光る。神秘な森の逍遙はどこまでも續いて行く。狐の足跡が一直線に丁寧についてゐる。兎の遊場もある。小鳥がチ〻と群れ遊んでゐる。純美な環境を默々と人間の一列はなめらかに滑りつゞける。

前旭岳にとつつきの、湯の噴き出てゐる谷を登り切ると森林帶を離れて了ふ。小屋から四時間の餘もかゝつてゐる旭岳は決して雲の間から頭を出さなかつた。越し方を振り返ると岩稜の遙か下の方に、蠟細工のやうな針葉樹の群が小さくそして整然と雪を戴いてゐるのが、何とも云へぬ不思議な誘惑を起さしめる。さうかうしてゐる中に深い霧と息づまるやうな風が襲ひ、しばし幻覺が山上を支配する。ある時は遙か遠く谷を隔てた尾根の岩と思つて、滑つて行くと忽然足下にそれがある。何物でもない。枯れた偃松の枝がさうした錯覺を呈したのだ。死線の彷徨を感ずる寒威は激しい。バロメーターは二千二百米を指してゐる。アルペンストックが思ひ切りカーンと鳴つた。かうして余義なく二度迄も引き上げさせられた心細さ。時計は十時半、シ

ユピッツをすぐ前にして、心は登高にのみはやつてゐるのに。——愉快な降滑を續けてゐる中に何時の間にか、ユコマペッの谷の奥に小さな炊煙を上げてゐる小屋を認める。種々な運命感を抱いてスキーを長い勞働から解放する。

夕飯を食べる間、太田さんはよく造材と伐採の話をした——採面と云ふ受持區域とその他に籤木があつて、それに柚夫が斧を入れる。凄まじく倒れ行く瞬間。あの巨大な蝦夷、椴が生命を失ふ響。一しきり雪は四散して世界は混沌となりそれもあへなく平靜に歸つて行く。大きな危險の伴ふ伐木の味は忘れられないと云ふ。盛りの時分には百五十人からの出面が入り、馬はこの山奥に迄來て橇道を角材の先にタマを附けて引つぱつて行く。材木に押し倒されて去年は八頭も死んだと云ふ。急坂をまつしぐらに滑る〳〵馬は必死に努力する、人間は夢中に後から制禦する。かうして大きな角材はごし〳〵山を下りて行つた。——

啄木鳥がガラ〳〵と空洞をつゝく音が聞えて來る。ユコマペッにはもう青い藻がゆらいでゐて、岩の上には河鳥が無心に囀聲つてゐる。

太田さんは一寸の休もなしに、鍬の柄を作つたり、茶碗を洗つたり薪を割つたりしてゐた。休息しろと云つても仲々しない。時にはじつと中年の、人の善い顔をして自分達の贅澤品を食ふのを見てゐた。分けてやると無性に有難がつて容易に手出しをしやうとはしない。罐詰の空罐も丁寧にとつてゐた。しかしどことなく慇懃な態度は始終山にばかり入つて無口な自分達の心とぴつたり合つてゐた。

ある日、夕飯を食べかけてゐる所へ林務官の一行が上つて來た。人の聲を感付いた時には本能的に驚戒し出した。その人達から事務所退去を命ぜられて柚夫小屋に移つた。次の日はどうでもこうでも登れるだけ登つて歸ることになつた。

太田さんは何時の間にか林務官の一行に雇はれる契約が出來てゐたので、その朝は云ひにくさうに賃金のことを切り出した。一日一圓二十錢ですと仲間の者から聞いたまゝを云つたので、餘り少いからと餘計にやつたら大變喜んでゐた。又氷帶に達して到頭目的を達せずに下山することになつた。午過ぎ小屋に歸つて見ると誰も居らなかつた。自分達で火をたきつけて飯を食べ、山の頭を見返りがちに下山した。

スキーは橇道を恐ろしい程滑つて、麓の美瑛忠別の村に着いたのは薄暮であつた。橇道が青く鏡のやうに光り、梢の林は眞紅に燃えてゐた。その上に大雪山の大山容は白く長く聳えてゐた。雄大さに涙が出て來た。薄桃色に映ゆるシュピッツ。氷の峯。雪の連亘。濃い森林帶。河のせゝらぎ。

ふと太田さんに別れを告げないで來たのが殘り惜しくなつた。

夏のヌタツク

一九二一、七、一八——二四

同行者。齋藤、佐々木。　案内者。高橋淺市

造材小屋發(前六、三〇)—湯ノ澤露營(後五、五〇)同發(前六、四〇)—委見池(前九、二〇)—旭岳三角點(前一一、〇〇)

太田さんは石狩原野の水田を起す爲に、既に美瑛忠別から他へ移住して居つた。何となく物足りなさが襲つて來た「北海道ならどこだつて歩かねえ所はないですよ。十七の歳から津輕を飛び出して美國へやつて來たゞもの」と淺市は元氣なことを云ひ云ひ雨にべつとりと濕つた笹原を漕いで行く。ピウケナイの澤を渡つてからは始終体を被ひ隱すやうな、蕗や虎杖の大群落を泳ぎ廻るのである。時折激しい驟雨に襲はれて、木陰に避難しては饒舌な淺市の話に聞き入る。面白い程世界人的な生活をしてゐるのでぐいぐいとつりこまれる。ユコマペツは常になく濁つて水量も多い。大きな角出しの鐵砲を越ねてから、河岸にある七八尺の蕗の林を分け、早速すつぽり被つて雨具の代用にする。天氣は恢復しさうにもないので例の造材小屋に又泊ることにした。

プチン〳〵とはねかへるたびに燃ねさかる、松の生木を山のやうに積み上げる。炎は紅い、人夫の半纏から湯氣がスウーと上つて行く。淺市は異國的(エキゾチック)なアイヌの話や得意の戰爭談をはずませる。話のあひま〳〵に驟雨は薄い屋根板をしばたく。淺市は小泉秀雄氏の指導をうけて、相當この山彙に通じてゐるらしい。人夫は紺野のあんちやんと云ふ青年と、それから犬の皮爺さんだつた。爺さんは未だに娶らず村に居ては常に酒ばかりひたつてゐるが、すぐれた体力をもつたほんとの御人好しだつた。カボチャ野郎と云はれて〻平氣でゐる。そして平常稼ぐ時には犬の皮を着てゐるので本名を呼ぶ人も少い。いつも默々と働いてゐて決して多くは語らなかつたが、多年の放浪生活は實に豐富で、砂金堀も土工もやつたと云ふ。船員をしたこともあるらしく時折、思ひついたやうに「スタンバイ」を云ふ。そして自分のことを「オールドマン」と云つて大人しく笑つてゐた。

寂しい山の男達は板間の藁の中にごろ〳〵ころがつて床板の間から生へて來た虎杖や羊齒の匂を嗅ぎながら、じいつと暮れなづむ溪間の夜の沈默を見守つた。ふつと石楠花煙草を見付け出した淺市は「火が消ねねえでねゝ」と云ひ云ひスパ〳〵すつてゐた。

次の朝は蕗の味噌汁で飯を詰めこんでから小屋を出た。張り切つた朝の光は巨大な針葉樹の木の間を洩れて、熊笹の葉末でかすかな輪舞をつゞけてゐる。平たい尾根に出て道なき道を一つの方向を定めて無性に這ひ廻る。歩みは遲

々として、足にまつはる雜草はこの上なく神經をいらだたせて來る。林班の道を求めて又の尾根を春スキーで通つた峠の邊から小さい澤へ下りて行つた。樹林は深く六つの人間を埋めて、陽も遮る位に陰欝な氣分を一帶に漲らせてゐる。懸命に努力してゐる人の子を自然はさも可笑しげに罵つてゐるやうであつた。森の中には錆びた色をした沼地や光苔、殘雪などを擁してゐる深い陷穽などがそこ〻に人間を威嚇してゐる。やがて行手は恐ろしい風倒木のため道を全く鎖されて了つた。壯大な嘗て地上に榮えた針葉樹は白い骨をあらはに露出して、慘ましくも見渡す限りの笹原を埋めてゐる。廢墟の壯麗、かうして惱まし續けられて失つた元氣を、度々仰ぐ旭岳やオプタテシケ、十勝の連山の眺めに恢復して漸く登り行いた。十時間の惡戰の後初めて左手に隱沼の濕原が見に、急坂を下つて濕地から竹籔を泳いで温るいユコマペツの上流、湯の湧く谷の下に達しほつと胸を下ろした。夕闇は熊笹で被はれた水面を輕く這つてゐる。早速竹籔を刈つて露營地を造つた。

ザリガニが敵意を示して鋏を振りながらも、憶病さうに後ずさりをしてゐる。天幕の中で糠蚊やブドに攻められ、辛うじて熊笹の固い筍汁をすすつて美味な夕食を終つた。

草鞋ににじむ河水が熱い位、湯のふき出てゐる澤を苔にすべり〳〵登り切つて、熊の爪掛けの急坂を越にると愈々御花畑に出た。チングルマとエゾコザクラは相變らずの姿を見せる。石楠花がいつになく美しかつた。旭岳の裾を巡る姿見池一帶の美しさ——山上湖がゆるい起伏の中にぽつり〳〵と明眸を輝かして、緣の柔らかい緣には無數の草花が咲き亂れてゐる。去年の夏アイシボブから登つてこ〻に二晩露營したことを思ふ。ツガザクラの群落を踏んで硫黃を碎きながら火口壁を登り初めた。ゴゴと噴氣孔は叫喚する。イハヒゲ、メアカンキンバイ、イハブクロの間にコマクサを求めながら赭い火山砂を踏む。クモマグサがなつかしげに顏を出す。やがて霧がかゝつて爆烈火口の緣邊を重荷に苛まれながら登つて來る人夫の姿が、美しい律動をして隱れたり現はれたりする。後旭に分れる雪谿に人夫を待たして、霧の中に二度目の登頂をやる。その夜は間宮岳の澤に幕營した。

忠別、化雲をまわつて一週間の豫定をたゞり美瑛忠別に歸り着いたのは、眞夏の美しく晴れた一日であつた。淺市達は金を受取ると長い禁欲から放たれて、直ぐに村の酒場に呑みに行つて了つた。犬の皮の爺さんはとう〳〵一緒の生活の間、何もつきつめた自分の生涯の話を洩しはしなかつた。それでも村を出發して、酒場の前を通つた時、一番ねんごろに人慕はしげに別れを告げて呉れたのは、あの寂しい犬の皮爺さんだつた。

旭岳は恐ろしい赫い口を開いて、麥の色づいた埃つぽい道を行く自分達を見送つてゐた。

冬のヌタツク

一九二二、一、七—九
同行者。板倉、後藤、加納、松川
小屋發(前六、一五)—前旭岳(前一〇、一五)—火口壁(前一一、一五クリーパー)—三角點(后〇、五五)—(後一、三〇スキー)小屋(後四、三〇)—美瑛忠別(後九、〇〇)

皆が美瑛忠別を出發した朝は稀な程の快晴でヌタツクの連山は隈なく見渡された。自分は前の日不注意から重荷にふられて、右足を挫き、その日は村に留まることになつたやるせなかつた。ノカナンの方に消えて行く、シーロイフアーの姿は痛々しい思出だつた。

納屋の中に集る雀をとつたり、玉蜀黍を飼にしてカケスをワナでとつたりするのを山の小兒と共に樂しみ、そしては氷つた蜜柑を圍爐裏にくべて溶かして食べ、淋しい一日をまぎらした。

次の朝佐々木と云ふ人夫が來て呉れて米噌の用意をした自分も一緒に相變らずの橋道をびつこひきひき、急坂はスキーをかついで他は心持よく滑つて登つて行つた。美しく晴れた日であつた。樹の間に旭岳の頭が見渡された。今年の小屋は左の方に一山寄つて、清水の湧き出る窪地にあつた。四邊はすつかり針葉樹にとりかこまれて、湧水は大きな沼になつて橋を渡ると長い元小屋がある。

「沼には鴨がゐらくゐるだ。鐵砲もつてくらよかつたに」

柚夫はとりぐ〜に云つてゐた。未だ仕事は始らぬらしい。屋根のすつかり空いてゐる小屋の眞中に爐が仕切つてあるそれに一抱もあるやうな丸太を井字形に山と積んで、ごうぐ〜と燃す。借しけもなくかうして熱を天井から放散して了ふ。大氣は冷たい。

人夫はあたりに氣兼ねしながら荷物を纏めて席を作つたり、薪をとつたりして忙がしい。その中に皆は山から下りて來た。腹が空いたと云つてリュックを漁る。爆烈火口に出たさうだ。素的な元氣だ。ほろ〜の飯も皆は默つて食べて呉れた。

その夜は山の神樣を祀るので小屋の住人は酒宴を始めた先づドテラ姿で一齊に神前に祀拜してから柾板の上にならべた頭付きの鰈の煮付けと酒と餅を振舞はれる。自分達は籔出しの寢る室に入つて張場から呉れた、大鐵瓶の酒と鰯を樂しんだ。彼等の階級には柚夫と籔出し(橋道を造る者)の二つがあつて前者が少し上位らしい。一齊に禮讃する折の美しさ。めら〜と燃ゐ上る炬火に赫い顏が暗に浮ぶ。野性をそそる哀調はこも〳〵吟じられた。彼等の群居、荒くれた人間と人間との接觸。原始に憧憬れて山に入る人。そして酒の力で人間の本然に歸らんとする人。彼等の罰則は殆ど酒何升で律せられてゐた。その夜放浪兒の慷慨も聞いた。純な社會主義を說く美鬚の男の說にも傾聽した。露領沿海州の山火事の慘話も聞いた。心からの叫びを擧げ得られる彼等はほんとに正しかつた。荒くれた男同志が、醉

奥手稻連山（札幌附近）松方義三郎

ひしれた男同志が他愛なく抱き合つて寢てゐる間に、火を燃して早朝から出發の準備にとりかゝつた。

六時には小屋を出て傍のスロープを急角度に登り初めた昨日開拓されたスプールは快く凍てついてゐる。春にも增して針葉樹は雪を多く被つてゐるので、純白の境地の輝かしさは形容の仕樣もない。ユコマペツの澤は遙か下方に眞黑な森を湛へて嚴かに眠つてゐる。忠別の浸蝕谷の上になだらかな化雲の裾が擴ごつてゐる。旭岳は顏を見せぬので忠實に尾根から尾根のスプールを傳つて行く。名も無い三角點を過ぎてから緊張した滑走を餘程續けて遂に再び湯の澤に出た。急傾斜を登る。白樺がその谷へ幻想的な曲線を畫いて澤山の枝を放射してゐる。それを雪が美しく裝ふ小さな岩塊に氣を引かれて登ると噴煙が勇ましく見へ出した

小さな雪庇をなしてゐる姿見池あたりの丘阜も過ぎて、霧に惱まされてゐる旭岳の美しい斜面にかゝる。黃色く硫黃が一帶の雪面を染めて、脚下には宿り岩の噴煙と沼の平が見へる。岩が出て緊張度は募るがスキーは用ゐ難くなる遂にクリーパーをはきスキーは堅く結束して雪に深くつきさした。杖を一本持つて眞直に美しい華のやうな雪面を踏みしめて登る。霧は絕へ間なく去來して眼界は岩と雪の外何物もない。たゞリッヂを賴りながら登つて行く。ごれ位苦心して登つたか知らない。何物も忘れてゐた。太陽がふと霧の間に姿を現はす。五人のものが一齊に聲をそろへて禮讃した。岩と雪との間を幾度「キンコ」岩の出現を期待して登つたことであらう。歸還時刻は近い。それに未だあらはれぬ。雄々しい信仰をひつさげてひたすら登り行いた遂にあらはれた。頂上へ後十分。傾斜は急になりクリーパーは秘やかな抱擁を硬雪にあたへてぐい〳〵登り切る。頂上の大きな雪庇、三角點。もうそれでよかつた。ストックで氷を割つて北大スキー部の旗を結びつけた。

霧は忽如として去つた。そして雲の海、まつ平らな雲の海が展開した。空は碧藍、透み切つた色。夏の雲海とは全く異つた無限の氷海が脚下の群山を幽閉して了つた。十勝岳あたりに一抹の雲。それ以外は動かうともしない。東北にあたつて小圓を畫いた虹が涯しない山上の奇蹟を人の子に默示した。默々と涙をためて山を下り、愼重にスキーを穿いた。旭岳は全く晴れて吳れた。比布、永山、愛別の連山、それから爆烈火口。その鋭いリッヂ、そこからは風に打ちのめされた雪が高く高く煙となつて騰り音もなく碧瑠璃の空に溶け込んで行く。噴氣孔の水蒸氣は逞しく風に反逆する。三角臺は山上に嚴かに、そしてクリーパーの跡が續く。泣かないで居られやうか。美しくそろつたスプールが類ない廣大なスロープを四本走つてゐる。ボーゲンの曲線が、そして氷つた姿見池の上に畫いたスウィングの曲線が山の子としてこれだけの幸が得られるのだらうか。苦痛の何物もなかつた。恐ろしく強く生きて居るのみであつた。

針葉樹の間を洩れる夕陽は薄紅色の絹を雪の面に畫いてゐる。ピウケナィ上流の山々は森の尖端に陽をうけて輝かしく燃ゐさかる。小屋にたどりついて夕飯を食べる。(握飯は氷つて用をなさず、一人が半斤のビスケットとハムで生命をつないだ)そして山の人々に別れを告げて七時と云ふに小屋を出た。小屋の屋根からは火の粉が飛び散る。小屋は眞紅な存在だ。そして背景の大きな針葉樹がその光を浴びて夜の世界に不思議な幻想をつくつてゐる。水は黑く冷たく光つて、淫奔な火の粉をチラ〳〵とうつす。

月下の橋道を小さな人間は狼の群が森林を馳け廻るかのやうに滑り始めた。總べて生ける者の彷徨を許さぬ冬の山の神秘の前に、逃れ出でんとする靈魂を嚴かに把持しながら野獸は走り且つ遠吠ゐする。月に織り出された一帶、野性の呼聲。拔け出した黑い魂のやうに滑る人々は坂路をころがつて行く。オーィと合圖が餘韻を殘す。孤獨——自我月下に踊り狂ふ山々は嚴肅な永遠を語つてゐた。

おづ〳〵して小屋の人々と碌々口も聞けなかつた内氣な佐々木さんは、夢中になつて自分等の後を追ふて來た。その夜遲く彼は自分の家に歸つた。

未墾地の人々が——太田さん、犬の皮爺さん、佐々木さんと淋しい存在を自分の胸の中にかうしていつまでもいつまでも主張してゐるのであつた。

——(三、三)——

圖版說明

エヴエレスト登山隊の主腦者

後列左から　Dr. Wollaston, Colonel Howard Bury (Leader), Dr. Heron, Raeburn.

前列左から　Mallory, Captain Wheeler, Bullock, Major Morshead.

一行は一九二一年九月二十四日 Kharta Valley の頭二三〇〇〇呎の地點に達し、エヴエレストの山頂に續く東北のアレト六〇〇〇呎の登攀可能なることを目擊した。

思ひついたまま

關西スキー倶樂部　木原　均

札幌に前後九年程居りましたがスキーの思ひ出ほど懐しいものはない、と同時に私が「スキー術」と云ふ本を書いたほど專越な恥しいことはない。極く少し許りスキ：をはいて辷つただけで自らを計らずに、あの本を出版したことは思ひ出してもぞつとする。取りかへしのつかない失敗をしたといつも後悔する。若し自由になるならあゝ云ふ本は全部買ひ集めて燒き捨てたいと思ふ。またこんな記事を書いて事新らしく古傷に觸るのも辛いが書かずには居られず一言申上ることにしました。

共著者として故理學博士遠藤吉三郎先生には誠に申譯がありません。先生が書かれた所は完全なもので私の書いた所だけ文章はナマで間違が多く、その上誤植の多いことは類がない。入營中で校正が充分出來ず本屋が勝手にやつたとは云へ、全然私に責任がある。むしろ出版を見合すべきであつたと思ふ。特に先生の貴い記事なども臺無しにしたのはかへすがへすも殘念である。

また御詫びしなければならないのは畏友並河學士に對してゞあります。表紙の圖案は同君に御願ひして立派なのが出來て、それを本屋に渡してあつたにも拘らず、リチヤードソン著スキーランナーの表紙をそのまゝ引き寫したゝめ、大變同君に對して御迷惑をかけました。之は本屋にも手落ちがありますが私が無經驗であつたゝめこんなことになつたのであります。こゝにその理由を發表して同君に深く御詫びを申上げます。

賣れ方がよくなかつた相ですから私としては淋しい氣もするがそれだけ有難い助かつたと云ふ氣特がする。若し出來るならば機を見て少しは御詫びに適ふ樣な本を編纂したいがまた失敗を繰りかへすかと恐れずには居られない。むしろ小さくなつて忘れられるまで時のたつのを待つ方がいゝらしい。もう忘れられた樣ではあるし、役にも立たないでせうが謝罪をしないと氣が濟まない。

シーズンが來てスキーの話や本が出る度毎に氣になるので貴重な紙面を拜借して遠藤先生の靈と並河學士、稀れではありませうが諸君、並にスキー同好者とに謝罪いたします。(十年十二、十五)

本邦に於けるスキーの團体（五）

照會事項

一、加入會員數及性質。
二、組織。支部の有無。
三、設立年月日。
四、事業。刊行物の有無。
五、事務所。（事務所にあらざるも會團の中心となり照會、通信をなし有る宛名）
六、首腦者。
七、會員の主なる滑走地。
八、主なる研究事項。技術上の傾向。
九、會員の有する記錄。
A　飛躍、（距離、年月、姓名）
B　長距離滑走（同上）
C　登山、（山名、標高、登山回數）
到着順掲載

關山スキー倶樂部

一、二百名。地方同好者、全國の本倶樂部に賛成したる同好者官公吏、會社員、學生、軍人、地方青年等
二、正會員、關山附近の在住者
特別會員、東京、關西、富山、金澤其他各地の人々
名譽會員、倶樂部の發展に盡したる功勞者にして正會員の推擧したるもの
會長一、副會長一、理事若干、技術研究員若干、
會費は徴收せず。會員にして會員章を希望する者に對しては徽章の實費と合して貳圓を寄附的に仰ぎて會の維持費の一部に充つ
支部なし。關溫泉に特設練習場あり
三、大正六年十二月
四、1　年末年始、三月下旬より四月上旬の二回に毎年倶樂部の事業として十日位の講習會を開催し關溫泉に來遊する初步のスキー家の便宜に供す
2　毎年三月下旬に大會を擧行す
3　各地よりの求めに應じて講師を派遣してスキー術の普及發達に資す
4　附近に青年會員、人夫等を集めて主として雪中の交通具としての實用的方面に利用する事を講習す
5　各地スキー團体と聯絡を保ち相互に研究事項を交換し圓滿に斯界の發達を計る
6　まとまりたる刊行物なし

五、信越線關山驛、關山スキー倶樂部
六、會長村越惣藏、顧問笹川速雄
　關山方面理事内田昇一郎、岡本義雄
　關温泉方面理事久保榮次、笹川幸平、笹川彦二
七、關温泉裏のスキーグラウンド、神奈山、晴井澤、十三師團練習地關山廠舍附近、燕温泉、前山附近
八、平地の滑走法、ビリゲリー式の登山、ジャンプ
　會員は各階級を含まれ居る故に山岳黨、練習場黨に分れ居れど練習場黨も最後には山岳黨になるらし
九、A　二十一米、八年二月、小林達也　關温泉前神奈
　B　關山より信州飯山迄國境横斷往復、會員數名右のうち一名は飯山より海温泉に至り同地より草津に出て輕井澤を經て淺間の湯の平迄登り引き返す距離不明 大正七年二月笹川速雄
　C　1　赤倉山より妙高山 神奈山を十一時間にて突破す距離不明、大正九年三月、小林達也、外人グリーンベルゲル氏
　　2　妙高山、神奈山、大正八年三月、會員數名
　　3　得尾峠から上高地、大正八年四月、小林達也
　　4　乙見山峠から杓子岳、大正九年三月、小林達也
　　（右二回は慶應山岳會スキー部の應援の爲め）
　　5　富士山、大正九年十一月、笹川速雄、學習院スキー部と共に
　　6　富士山、五合目迄、結氷にて引き返す、大正拾年二月小林達也、外人ウインクラー、グリンベルゲル兩氏と共に
　　7　盤梯山　大正十年二月、笹川速雄
　　8　寒風山　大正十年三月、笹川速雄
　　9　白馬山　越後より信州へ横斷、大正十年三月、笹川速雄、富山の内山氏と共に

六甲スキー倶樂部

一、五十名。現在增しつゝあり
二、本部、大阪。
　支部、東京。神戸
三、大正八年設立。本年より活動開始
四、機關雜誌「雪のさゝやき」
五、大阪市北區高垣町　吉田義治
　神戸市榮町二丁目　加島銀行内　春日英三
六、吉田義治。春日英三、陰山寅造
七、六甲山、伊吹山
八、九、未熟にして取立てゝ擧ぐべきものなし。

告

本項は此にて〆切ります。返信を頂くことが出來なかつたのも二三ありますが、主なる團体を網羅し得たことと信じます。此等多數の團体が各圓滿に發達し、地方的偏見を去つて本邦スキーの進歩に盡されん事を切に希望するものであります。
終りに臨み資料を呈供して下さつた人々に厚く感謝の意を表します。

墺國製スキー登山用具

Bilgeriski, Alpineski Wienski

Manufactured by

Mizzi Langer Kauba Co.

複杖。眼鏡。帽子。笛

登山靴。登山スパイク

其他附屬品一式

最近入荷致しました。至急御註文下さい

マリヤ運動具店

大阪市北區堂島北町六番地

電話北二八三六番　振替口座大阪六〇七七七番

豊富なる積雪

附近にはニセコアンヌプリ、イワヲヌプリ、チセヌプリ、メクンナイ岳等五千尺内外の高嶺を有し、東に秀峯蝦夷富士を望む四周は整正なる緩急各種の斜面を有し、クリスチアニヤ。テレマークなど思ひのまゝなり。

快適なる雪質

滾々として湧出する清純無比の温泉は終日滑走の疲勞を醫し、凛烈なる寒氣を忘れしむ。

スキーランナーの爲に設備全く整へる

青山温泉

—昆布温泉株式會社—

北海道本線　昆布驛